

2005年日本国際博覧会(愛・地球博)政府出展事業

政府出展催事

「宮内庁雅楽と歌合わせ ～王朝の美、歌と舞い～」

-
- 名称 : 愛・地球博特別公演 「宮内庁雅楽と歌合わせ～王朝の美、歌と舞い～」
- 主催 : 経済産業省、財団法人2005年日本国際博覧会協会
- 開催日時 : 2005年9月4日(日)
○第1回/14:00～15:30 (予定)⇒整理券配布は当日9:00～ EXPOドーム入口前にて
○第2回/17:00～18:30 (予定)⇒整理券配布は当日12:00～ EXPOドーム入口前にて
※開場は45分前 ※博覧会協会ホームページからの予約もできます(8/16より開始)
- 会場 : 愛・地球博 長久手会場 EXPOドーム (客席数/2500席)
- プログラム概要 :
- 第一部 「天徳の歌合わせ」 /出演:宮中歌会始披講会
和歌の中でも自然との共存や、人間の目に見えない喜びや哀しみを表現するという分かりやすいものを選んで構成。講師が左方と右方に分かれ、判者がそれを判定します。今回は、毎年始めに宮中で行われる「歌会始」のメンバーが勢揃いし、20番のうち4番を再現します。
 - 第二部 「宮内庁雅楽」 /出演:宮内庁式部職楽部
雅楽には、「管絃」「舞楽」「歌謡」の3つの演奏形態があり、中でも舞楽は左方の舞い(中国系)と右方の舞い(朝鮮系)に大別されます。今回、左方は4人舞いの「春庭花」(しゅんでいか)と、右方は1人舞いの「抜頭」(ぼとう)を舞います。
- 監修 : 全体監修/中島 宝城(宮内庁歌会始委員会参与)
雅楽監修/東儀 俊美(元宮内庁楽部首席楽長、現日本芸術院会員)
歌合せ監修/青柳 隆志(成徳大学助教授)
美術監修/小原 宏貴(小原流五世家元)
-

【 参 考 】

◆ 雅楽とは…

「雅楽」は、日本古来の歌と舞、古代アジア大陸諸国から伝来した器楽と舞が日本化したもの、およびその影響を受けて新しくできた楽曲・舞・歌の総体です。ほぼ10世紀(平安時代中期)に今日の形に完成した日本の最も古い古典音楽で、「管絃」(かんげん)「舞楽」(ぶがく)「歌謡」(かよう)の3つに大別されます。いずれも千数百年の伝統を有し、大変貴重な歴史的価値を持つ音楽文化財で、現在では宮内庁の楽部が伝承する雅楽がその基準となっております。また宮内庁式部職楽部の楽師が演奏する雅楽は国の重要無形文化財に指定され、楽師全員が重要無形文化財保持者に指定されています。宮内庁雅楽は宮中の儀式、饗宴、園遊会などの行事の際に演奏を行ってきましたが、昭和31年から文化団体や広く一般に公開するため、皇居内の楽部において毎年春秋2回演奏会を催しているほか、文化庁及び関係都道府県の要請により、全国各地で地方公演を行い、国立劇場においても年に1回ほど公演を行っております。また海外公演も世界各国で多数行われております。本公演においては、次の2曲が舞われます。

- 左方舞「春庭花」(しゅんでいか)：唐の玄宗皇帝が春に花の咲くのが遅いことを憂い、楼上で一曲を奏すると、庭に百花が咲き乱れたので、この曲を「春庭花」というようになったとの伝えがあります。左方の4人舞で、舞人は蛮絵装束の右袖を脱ぎ、卷纒(けんえい)の冠に挿頭花(かざし)を付け太刀を帯びて舞います。後半、舞いながら舞台を廻る姿は、あたかも花が開いたり閉じたりする様を思わせて誠に優麗な舞です。
- 右方舞「抜頭」(ぼとう)：その昔西城で、親を襲った猛獣を子が山野に探し求めてついにその仇を討ち、喜ぶ様を表した舞であるとされています。左方と右方の双方にある一人舞ですが、今回は右方の舞を演じます。舞人は、眉を上げ赤い面を付け、毛縁(けべり)の裃装束(りょうとうしょうぞく)を着け、右手に桴を持って舞います。

◆ 歌合わせとは…

天徳4年(西暦960年)3月30日、当時35歳の村上天皇は、宮中内裏の清涼殿で、歌合わせを催されました。歌合わせとはあらかじめ作られた和歌を左方、右方の2つのグループに分かれて、一首ずつ読み上げ合い判者と呼ばれる審判がそれを判定するという日本古来の伝統的な競技です。村上天皇は和歌や漢詩などの文学を非常に愛好され、この「歌合」を何度も催されましたが、なかでも当時大規模に行われた天徳歌合わせでは、「恋」をテーマに読み上げた勝負が伝説となって語り継がれています。平兼盛の歌「しのぶれど いろにいでにけり わが恋は ものや思ふと 人のとふまで」と、壬生忠見「恋すてふ 我が名はまだき たちにけり 人しれずこそ 思ひそめしか」この勝負は判定がつかず、最後に御簾中の天皇が判定を下し、兼盛が勝ちます。敗れた忠見は無念のあまり患って亡くなったと語り継がれています。

本公演は、その天徳の歌合わせをダイジェスト版にして約30分にまとめあげたものです。4つのテーマをもとに和歌を8首読み上げます。公家として登場しますのは、現在でも宮中行事で和歌の披講を行っております宮中歌会始披講会の皆様で、歴史的にも、文学的にも大変貴重な公演です。